
先輩と僕の部活動

なら那智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩と僕の部活動

【Nコード】

N3091S

【作者名】

なら那智

【あらすじ】

無愛想な先輩とめんどくさがりな僕の活動日誌。いろんな依頼、相談、承ります。

先輩と僕と犬（前書き）

読みきりにしようと思いましたが。この設定で色々書いてみたいので連載にしました。まったり書いていこうと思います。

先輩と僕と犬

僕は廊下を走ってる。

それも全速力で。

理由は単純明快、遅刻しそうだから。

正直ここで遅刻するなんてクズ野郎だな、と思う人もいるだろうな。

だけどこの遅刻は僕に非はない。

すべての責任はホームルームを長引かせた担任のせいだ。

言い訳？

いいや違うね。事実だ。

通行人の痛い視線を感じながら、目的地へとたどり着く。

めんどくさいことがあるかと思うと回れ右をしたくなるけど、そんなことをすると後が怖い。

なので、荒い息のまま扉を開ける。

その瞬間、風を切るような音とともに何かが飛んできた。

——あ、これティッシュだ。

そんなことが頭によぎった瞬間、僕の顔面に直撃する。

「ぶへあつ。」

そんな声が思わず飛び出る。恥ずかしい。

「遅い。」

少々遅れただけでこれは理不尽な所業だと思ったけど、顔には出さず謝しておく。

「で、なんで遅刻したの。」

顔が少しジンジンするまま、床に落ちたティッシュを拾い上げてもある場所へ戻しに行く。

「ホームルームが長引いてしまったんです。」

この本棚、埃かぶってる。

誰か掃除してくれないかな。

「ふーん。」

先輩が窓の近くにある机に足を乗っけながらつぶやく。

古い応接室を勝手に借りて使用してるので、僕の座ってるソファはふかふかなのに

先輩はわざわざどっかから机と椅子を取ってきて使っている。

「ま、どうでもいいけどね。」

「じゃあ聞かないでください…」

ほんと、無愛想でよくわからない人だと思う。

なんで僕、こんな部活入ったんだろ…。

中学と同じバスケット部に入ればよかった。

最初はそのつもりだったんだけどな。

「で、先輩。」

先輩は指先でペンをくるくるしている。

あれ俺できないんだよなあ。

「何？」

「今日はなんか予定あるんですか？」

とりあえずめんどくさい事がなければいいんだけど。

あったとしても楽なのでお願いしたいところだ。

「特にない。」

視線を指先にあわせたまま先輩が答える。

久しぶりに活動がないので少し…いや、すごくうれしい。

だけどその喜びもつかの間、扉をノックする音が聞こえる。

…冗談はよしてほしい。

ほんとお願いだから。

「どうぞ」

先輩がそう答えると、おずおずといった感じで扉が開く。

あ、女の子だ。可愛い。

鈍い痛みが背中に走る。

…今度は野球ボールか。

どこからとってきたのか教えてほしい。

「鼻の下伸ばしすぎ。」

とりあえず、なんでもかんでもぶつけるのはやめてほしい。

「そこにかけて下さい。」

とりあえず扉の前で立ちっぱなしの女の子に、僕は前の椅子をすめる。

女の子が座ったのを見はからって先輩が、なおもペンをくるくるしながら聞いた。

「用件は？」

女の子は気難しそうな顔をして、しゃべりだす。

「・・・私の家の近くで謎の事件があつたんです。」

事件、と先輩が繰り返す。

「傷害事件です。毎日けが人や重傷者が出てるんです。それも同じ場所同じ時間に。幸い死人はででないんですが、怖くて。」

この人相談するところ間違つてないか？

そついうのは警察に任せてだな…。

「えっと、ここはそついう相談は…」

「で、何が謎なの？」

僕の言葉に先輩がかぶせる。

おいおい、受けるっていうのか…。

「それが…人間がつけれるような傷ではないらしいんです。動物の牙のような傷って聞いてます。」

だけど私の住んでところは住宅街でそんな動物が出るとは思えな

いし、確認されてないようです。」

確かに謎だけど、僕らに相談するようなことは限らないだろ。

どうか先輩断ってください…！

先輩のほうを見ると、くるくるしていたペンが手から床に落ちる。

そして乗っていた足を机からどかすと、立ち上がった。

「それで…どうしてほしいの？」

「さむいな」

寒すぎる。

なんだってこんな季節の2時に外にいなきゃいけないんだ。

しかも僕は12時に寝る主義なんだ。確実に明日寝坊だよ。

それにしても、先輩は夕方と変わらない格好なのに寒くないのかな。

「ねえ。」

いきなりしゃべりかけられたので少しドキツとする。

「なんですか？上着なら貸しませんよ。」

あいにく僕は、こんなクソ寒い中上着を貸してあげられるほどイケメンじゃない。

「そんなことじゃない。何か感じる？」

「いえ、まだなにも。」

よかった。

イケメンじゃないけど、先輩に貸してと言われたら貸さなきゃいけない。

何が飛んでくるかわからないからね。

「今回は外れみたいですネ。」

あの依頼者見るからに流されそうな感じだから、どっかで僕らのうわさを聞いて

不安だから相談に来ただけだろうな。

「もう帰りましょうか。」

一応、依頼者の指定の時間から1時間はたつてゐる。

帰つても怒られないはずだ。

「まづて。」

僕が立ち上がり踵を返そうとすると先輩が止める。

疑問に思いながら振り返ると、先輩は真剣に道路の奥を見つめていた。

僕も何かの気配を感じ始める。

「…来ましたね。急に気配が現れました。」

「そうね。」

前方から、体軀が大きい犬のようなモノが歩いてくる。

おもわずため息をつく。

こんなものために僕は小1時間待たされたのかと思つと腹が立つ。

「先輩。僕が行きます。腹が立つてゐるんで。」

「その必要はないわ。」

死んだような目をした犬はゆっくり近づいてくる。

犬が地面をける。

とびかかってきた犬は先輩に触れることなくはじかれ、もといた場所
に叩きつけられる。

痛がる様子もなく犬は立ち上がると、再度襲いかかってくる。

先輩がおもむろに手を前に出す。

その手に犬の鋭く太い牙が触れた瞬間、犬は焼けこげ、地面に落ち
た。

次の瞬間には犬の死体はあわい光になって消えていった。

待った時間のほうが何倍も長かったな…。

「…帰りましょうか。」

「そうね。」

後日、女の子が部室に現れお礼をしていた。

傷害事件が起こらなくなっただけらしい。犯人はまだ見つかってないよ

うだ。

先輩はその日もペンをくるくるしていた。

とりあえず、依頼なんて来なければいいなと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3091s/>

先輩と僕の部活動

2011年10月8日22時53分発行